

The front hospital

ザ フロント ホスピタル

大高病院
東京都足立区

二次救急、精神疾患身体合併症患者の 受け入れ等を通じて、救急医療の円滑化を図る

大高病院は2013年、「救急医療の円滑化」を目的に東京都足立区に開設した。「大病院に行くほどではないが、ちょっと心配」という地域の人たちを支えるほか、基礎疾患に認知症や精神疾患のある患者さんの身体合併症例を積極的に受け入れ、さらに救命救急センターの後方ベッドとしての役割も持つ。開設から約1年にもかかわらず、地域に欠かせない病院として支持されている。

救急医療に生じる精神疾患 身体合併症例の問題に尽力する事

大高病院は2013年、大高祐一院長が「救急医療の円滑化」を目的に開設した。大高院長は、東邦大学医学部を卒業後、当初は精神科医を目指していた。当時の研修は、現在のように各科を学ぶのではなく、精神科の専門性が高いストレート研修。精神疾患で入院中の患者さんにも、内科や外科の疾患をかかえる人がいるため、大高院長は、救急初期診療を身につける必要性を感じたという。

「東京医科大学で救急を学び始めたのですが、現場で患者さんに接するうち、救急医療にやりがいを感じるようになりました。当初は救急を学んだ後、精神科に戻るつもりでいたのですが、救急にいることで精神科の知識を持った救急医が必要だ。どうしてこれまでになかったのだろう、と強く感じるようになりました」と大高院長。その後、大高院長は日本救急医学会専門医および精神保健指定医の資格を取得。「救急と精神科を診てきた自分が、役に立てることがあるにちがいな

い。やってみようということで開業を決意しました」。

都内他地域に比べ、救急車の出動台数が多い足立区での開業を考え、候補地を選定。環状7号線が近くにあり、救急車の出入りもしやすい現在の土地に決定し、13年12月に22床の入院施設をもつ病院として開院した。



「東京都や足立区などの行政のほか、消防庁や地元消防署にも挨拶に出向きました。認知症や精神疾患の患者さんの身体合併症例を積極的に受け入れる救急医療機関がほとんど無いため、スムーズに受け入れてもらえました。また、地元の地域の方たちにも、きちんと説明することで理解を得られ、順調にスタートを切ることができたと思います」

地域の人たちが気軽に受診できる 救急科を目指す

大高病院の特色として、①認知症や精神疾患をもつ身体合併症患者の受け入れ、②救命救急センターの後方ベッドの役割、③外来診療による地域住民の不安解消の3点が挙げられる。

認知症や精神疾患をもつ患者さんは、「治療の同意が得られにくい」「予測不能な行動がある」という理由から多くの病院で受け入れを嫌がられる。大高病院では、在宅や入所施設のそういった患者さんに急性期医療が必要になった場合には、全面的に受け入れている。急性期を脱した後は、在宅や元の施設に返しており、家族や施設にとって心強い存在となっている。

また、救命救急センターの後方ベッドの役割について大高院長は、「救急医療システム全体を効率的に動かすことに貢献したい」と考えている。現在の救急医療では、重症者は救命救急センターに運ばれるが、救命救急センターに集まりすぎることシステム全体に不都合が生じている。大高院長は、同院を「救命救急センターでの治療をそのまま引き継げる医療機関」として位置付けることで、効率的なシステムの一翼を担っているとも考えている。

自殺企図者のけがの治療や精神症状の管理など、総合的なケアを依頼されるケースが増え、月に30～40人の患者さんが救命救急センターから紹介され

The front hospital

ている。

大高院長が特に力を注ぎたいのは、地域に対しての貢献だ。

「コンビニ受診が問題になっていますが、本来、医療は患者さんを中心に考えなければいけない。“かかりたいときにかかれる”というのが基本だと思います。ですから、当院では、切り傷や擦り傷、頭をぶつけたなど、ささいなことでも受診しやすいよう、パンフレットやホームページを作成しています。患者さんの体や心の痛みを取り除くためにurgent careを行い、患者さんを支えていきたいと考えています」。

スタッフは、救急と精神科領域に精通した人物を大高院長が連れてきたのかと思いきや、すべて公募だという。「今までにない新しいことを始める。救急に興味があり、まっさらの状態から取り組める人」と募集を掛けたところ、大高院長の意図を汲むスタッフが集まり、今でも希望者は増えている。

「希望者には見学に来てもらいます。雰囲気を感じてもらい、自分たちの役割をきちんと説明します。明確な意図をもって取り組んでいることを理解してもらうことで、スタッフにも、やりがいを感じてもらえているようです」。

urgent care

- 切り傷、擦り傷
- 転んだ、頭をぶつけた
- 虫刺され、動物に咬まれた
- 小さなやけど、日焼け
- 急な皮膚の発疹、じんま疹
- 目、耳、鼻の異物感、アレルギー
- 急な発熱
- インフルエンザ、咳、のどの痛み
- 頭痛
- 気管支喘息発作
- 吐気、下痢
- 尿路結石、胆石の痛みが再発した
- どこに受診したらよいかわからない
- かかりつけの医療機関がお休み

リハビリ施設の開設や 在宅支援が課題

大高病院は住宅街の一角にあり、総床面積760㎡の中で機能的な建物となっている。構造的にこだわったのは、できるだけ柱を立てないこと。床面積が広がるうえ、死角を作らないことで、スタッフの目が患者さんに届きやすくした。また、外来と救急搬入口がある1階は、初療室を中心に患者さんを移動させる動線に工夫を凝らしている。救急車から降ろしたストレッチャーは、患者さんの足側から初療室に入れる。CTなどの画像撮影が必要な場合は、方向転換せず頭側から撮影室に入れるつくりだ。また、電気や酸素などの配線は床をわせず、一括して上部のシーリングペンダントで操作できるようにしている。

照明も工夫しており、初療室や隣接したHCU(4床)、重症者が入院する病棟などは、スタッフが働き

やすいように照度の高いものを使用。一方、外来待合室や廊下などは壁を淡い色にしたり、間接照明を用いるなど、落ち着く空間づくりを意識している。

コンセントも通常は目立たない低い位置に設定するが多いが、看護師やスタッフの働きやすさを重視し、高い位置にしている。

大高院長は「今までの経験で、スイッチやコンセントには使いやすい位置がある。自分達が働くことをイメージして設計しているので、実際に仕事をしてやりやすさを実感しているところです。現場に立ち続けている感覚が生かされたと感じています」

今後の課題について大高院長は、救急医療や予防医療の充実、救命後医療への取り組み、次代のスタッフ育成を挙げる。

救急医療の充実について「開院から間もないため、自治体のシステムには今年8月から入れる予定です。救急隊には当院の特色を理解していただいています



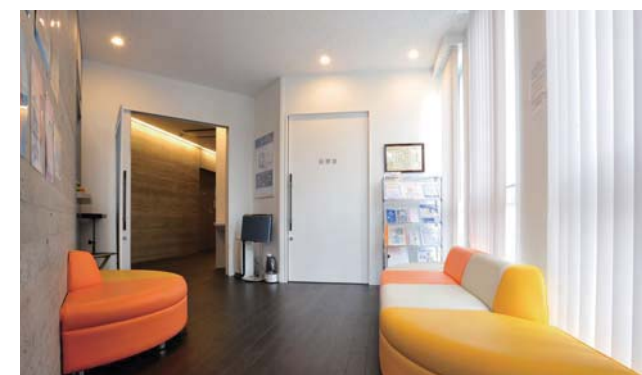
病棟の照明は柔らかいものを採用。



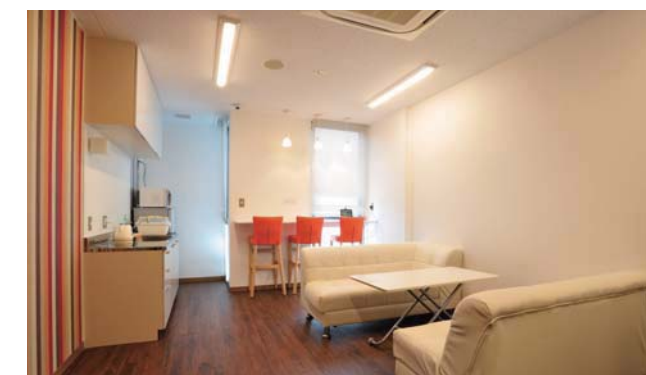
スタッフ用パウダールームはゆったりとした造り。



間接照明と打ちっ放しコンクリートでモダンに。



暖かな光が差し込む待合室。



仕事の合間にくつろげるスタッフルーム。



患者さんの移動動線に配慮した初療室。



配線・配管は上部のシーリングペンダントに。



初療室の隣室に配置したCT。



HCU(4床)も配置。

から、システムに入ることさらに患者数は伸びていくだろうと考えています。また、患者さんの命を取り留めたが、その後の生活をどうするか、どう支えていくかという救命後の医療も、より重要な課題だと感じています」と大高院長。身体機能や精神面の回復、社会復帰なども含めた支援体制の構築を図っていきたいという。

「具体的にはリハビリ施設の開設や在宅支援です。在宅支援の方は、在宅療養支援病院として診療を始めたところです。また、生命にかかわる状態で救急医療の世話にならなくてもすむよう、予防医学の部分も充実させていきたい。当院では、最新のMCG検査に加え、頸動脈の超音波検査等を行い、脳梗塞や心筋梗塞を未然に防ぐ取り組みも開始しています」。健診に加え、住民向け講座など、予防の重要性についての周知活動も行っていく。

さらに大高院長は、「仕事の基本はここで学んだ」と言われるような病院にしていきたいと抱負を語る。「私は、医療技術や知識を、その患者さんや家族にと

って役に立つかどうかを判断基準として、用いることができる人が真の医療者だと考えています。評論家的なスタンスではなく、精神面や社会的背景も含めて患者さん中心に医療を行っていける人を育てていくことを目指しています」。

hospital data



大高病院

〒121-0815
東京都足立区島根3-17-8
TEL:03-5856-7319
<http://otaka-hp.jp/>

- 診療科目: 救急科
- 東京都指定二次救急医療機関